博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　成田 節

学位申請者　信國 萌

論　文　名　事象を項に取るドイツ語形容詞と事象を表す語句の統語論的実現と意味的特性 ― 事象のアスペクト的解釈の対立を手掛かりに ―

審査結果

本学教授の成田節（主査，ドイツ語学），藤縄康弘（ドイツ語学），浦田和幸（英語学），本学准教授大谷直輝（英語学）および慶應義塾大学教授田中愼（ドイツ語学）の５名からなる審査委員会は，論文審査および9月12日に行われた最終試験の結果，信國萌氏に博士（学術）の学位を与えることが適当であると全員一致で判断した。

論文の概要

本論文は，「事象」を項とするドイツ語形容詞表現における意味論的関係がどのような条件の下，どのような統語的表現形式で現れるかという疑問に，コーパスのデータに基づいて取り組んだ経験的研究である。ドイツ語学研究において文の中核的要素としての形容詞は動詞ほどではないにせよ，少なからず取り組みが行われてきているが，そこで扱われる形容詞は主にはgroß「大きい」，lang「長い」，jung「若い」，rot「赤い」のような，人や物の性質を述べるものであるか，あるいはmöglich「可能だ」，sicher「確かだ」，wahrscheinlich「蓋然的だ」など，モダリティと関連の深い命題的判断を下すものが中心であった上，用法の点でもその述語的ないし付加語的用法に事実上の関心が払われてきたと言える。こうした状況下，信國氏の論文の最大の特色は，事象を項に取る形容詞を調査対象に据えたこと，および，当該形容詞と事象的項との関係が述語的・付加語的よりもむしろ副詞的用法で具現する点に光を当てたことに認められる。また，このような経験的研究面での長所に加え，理論面でも，「事象」を世界外的存在であるコトとしての「命題」からは明確に区別し，むしろ世界内的存在の一種として人や物といった実体に準じて捉える見方を一貫したことで，部分・全体論を媒介として人・物の個体的・質量的側面と通底する事象のアスペクトに関わる各形容詞の特性が当該形容詞の振舞いを根本的に条件づけているという結論を導いた点は特筆に値する。

本論文は以下の6章で構成される。

第1章　はじめに
第2章　事象とは何か
第3章　形容詞と，形容詞が項に取る事象の関係
第4章　事例調査と分析
第5章　考察
第6章　おわりに

第1章で研究の目的・対象・課題を紹介し，論文の構成を説明したのち，第2章では「事象」が存在論的に実体の一種であり，この点でコトである「命題」よりもむしろモノである「人・物」と並行的に捉えられることを，先行研究に基づいて明らかにしている。その際，出発点としたのが哲学者デイヴィドソンによる存在論であるが，この考え方は次章以降の言語学的分析においても状況項を導入する根拠となる重要な

ものである。また，モノと事象の存在論的共通性をLeiss (1992, 2000) らの部分・全体論に基づいて再確認することも行っている。これにより，モノの個体性・質量性が分割（不）可能性と累加（不可能）性に依拠しているように，事象も同じ観点から有界的なもの（到達，達成）と無界的なもの（活動，状態）とが区別されるのである。

第3節では，前節の存在論に基づく形容詞研究の古典であるVendler (1968) を参照し，どのような表現形式が項の「事象」性の指標となるのか，それに基づいてどのような形容詞が事象を項に取る形容詞であるのかを整理し直した。それによると，「事象」は—多くの場合，動詞からの派生という手続きを踏むとはいえ—名詞句によって示すのが一次的である点において，文によって示すのが一次的である「命題」とは明確な一線を画し，むしろモノとより一層の共通性を有することになる。また，そのような事象をもっぱら項とする形容詞として，英語を分析対象とした Vendler (1968) は，fast に代表されるA3クラス，easyに代表されるA4クラス，eagerに代表されるA5クラスを挙げ，A3にはcarefulも，その表現形式上の性質から含まれるとしているが，信國氏はこの後者の点については，立論に経験上の不備があることを指摘し，注意を喚起している。さらに，Vendler (1968) の言語学的基準が述語的用法に依拠しているのを相対化する格好で，形容詞の付加語的用法と副詞的用法についても先行研究に触れ，この2つの用法がデイヴィドソンの発想に立った状況項の導入によって有機的に関連づけられるとの見通しを提示している。

以上の理論的考察を経て第4章では，ドイツ語の経験的分析を展開している。まず，調査の具体的課題として，事象を項に取る形容詞ごとに，①統語的機能（述語的，付加語的，副詞的用法）の分布，②当該事象とその参与者としてのモノとの意味論的関係，および③当該事象のアスペクト的性質を確認することを挙げている。また，そのために対象とする形容詞には，前節における Vendler (1968) の批判的検討を踏まえ，以下の4クラス9語を選定し，

I　schnell「速い」，langsam「遅い」
II　leicht「易しい」，schwer「大変だ」
III　vorsichtig「注意深い」，leichtsinnig「軽率だ」
IV　überdrüssig「嫌気がさしている」，müde「うんざりしている」，satt「飽きている」

それぞれについて，ドイツ語研究所（Institut für Deutsche Sprache）がオンライン公開している大規模コーパスから300例ずつ事例を収集して分析を行い，その分析結果をもとにして，続く第5節でクラスを横断する全般的な考察を行っている。これら2つの章の分析と考察は量的にも質的にもバランスの取れたものだが，その主な結果は以下のようにまとめられる：

- クラスIの形容詞は副詞的用法が大勢を占める一方，述語的用法の述語対象語や付加語的用法の被修飾名詞にモノが現れる場合，このモノは事象に主体として関与するものである。こうした振る舞いは，クラスIの形容詞がアスペクト的に無界の事象を要求することに起因する。
- クラスIIの形容詞も副詞的用法が大勢を占めるが，述語的用法の述語対象語や付加語的用法の被修飾名詞に現れるモノは事象の客体である。こうしたクラスIとの対照的な振る舞いの背景にあるのは，このクラスの形容詞がアスペクト的に有界の事象，とりわけ到達を求めることにある。
- クラスIIIの形容詞は，3つの統語的機能の分布に目立った偏りがない。また述語的用法における述語対象語や付加語的用法における被修飾名詞にも事態の参与者だけでなく，当該の事態そのものも現れ得る。こうした平準化された分布はクラスI・IIのいずれとも異なるものであり，carefulなどをfastなどとともにA3クラスに一括したVendler (1968) の分析は，少なくともドイツ語には妥当でないことが明らかである。アスペクトの点では，vorsichtigが「活動」を優先する一方，leichtsinnigはこれに加えて「到達」も好む。
- クラスIVの形容詞はüberdrüssigに見られたごく少数の付加語的用法の事例を

除き，事実上もっぱら述語的用法で用いられ，副詞的用法では決して用いられない。また，述語対象語もモノのうち「人」に限定されるとともに，事象も2つめの項として必須である。アスペクト的には無界の活動を好むとはいえ，状態，到達，達成も含めたすべての種類を許す一方，到達や達成は必ず反復相で上書きされる。

- 全体を通じて事象を項に取る形容詞は，特定のアスペクトを優先する一方，優先されないアスペクトの共起も，実際には優先的アスペクトに引きつけた解釈変更によって容認される。その際，クラスIIの形容詞における「状況的可能性」のモダリティのように，副次的な意味作用を伴うこともしばしば見られる。

最終の第6章ではこれらの成果を振り返るとともに，今後の課題として，gut「よい」やschön「素晴らしい」のような，モノ・事象・命題間の選択制限がない形容詞についてもこの存在論的区別がどの程度有効であるのかどうかを確かめることを挙げ，これを通じて本論文の趣旨をより強化し得る展望を示して結びとしている。

審査の概要

審査委員は本論文を各自精査した上で，9月12日（木）14時から小会議室にて審査委員会を開き本論文の評価について話し合った上で，15時から中会議室で最終試験を行った。審査委員の紹介と進行の説明が行われた後，信國氏から約40分間に及ぶ論文概要の説明があり，引き続き約90分間にわたり質疑応答が行われた。合計2時間を超える最終試験の終了後，小会議室で最終審議を行い以下のとおり判断した。

本論文は以下の点において特に優れていると評価できる。

- ドイツ語形容詞に関する従来の研究で見落とされていた局面に光を当てた。すなわち，事象を項に取る形容詞を調査対象に据え，当該形容詞と事象的項との関係が述語的・付加語的よりもむしろ副詞的用法で具現する点を実証的に示した。
- 「事象」を世界外的存在であるコトとしての「命題」から明確に区別し，世界内的存在の一種として人や物といった実体に準じて捉える理論的立場に立つことで新たな知見を得ることができた。すなわち，部分・全体論を媒介として人・物の個体的・質量的側面と事象のアスペクトが通底し，事象のアスペクトに関わる各形容詞の特性が当該形容詞の振舞いを根本的に条件づけているという結論を導いた。
- ドイツ語において明確に形態化されないアスペクトの重要性を形容詞の用法を例として示すことに成功している。
- 調査対象とする形容詞を適切な先行研究の批判的検討に基づいて選択しており，説得力がある。
- 大量のデータを的確に整理・分析し，各形容詞の内在的意味関係（各形容詞が事象目当ての性質か，事象に参与する人目当ての性質か，双方の関係性か，また，それらのアスペクト的選択特性）とそこから派生する意味論的・統語論的諸現象（モダリティの分布，統語的機能の分布，補足語の形式など）との関連性を明確にしている。

他方，審査委員から以下のような質問や指摘があった。

- 事象と命題の区別についてより明確な説明が必要であった。
- データ収集方法の説明にやや言葉足らずと感じられるところがあった。
- コーパスから抽出した用例は文脈を広く見ないと文意が取りにくいものがあるが，その点で解釈に疑問の残る用例があった。
- 「項」などの用語の使用において意味論と統語論のレベルの混在が見られるところがあった。

これらの質問や指摘の大半のものに対して信國氏から的確な説明および補足がなされ，このテーマを巡る信國氏の深い洞察と柔軟な思考力が示された。現時点ではまだ十分に説明できないとされた問題点についても，その解決に向けての糸口は掴みかけているようであり，今後の研究の発展が期待できる。

以上の審査および最終試験の結果に基づき審査委員会は全員一致で本論文は博士（学術）の学位を与えるにふさわしい学術的成果であると判断した。